

山梨県と周辺地域における近現代の石積技術

—『石積の秘法とその解説』から辿る石積技能者大久保氏の系譜—

岩下友美

1. はじめに
2. 石積技能者大久保氏
 - 2.1 技能者としての系譜
 - 2.2 大久保家の居住地
 - 2.3 明治時代以前の大久保家
3. 大久保家の居住地に関する問題

4. 「社会奉仕録」による大久保氏構築石積
 - 4.1 大久保家家宝「社会奉仕録」の発見
 - 4.2 「社会奉仕録」にある石積の記録
 - 4.3 近代以降の石積技術と変遷
5. 大久保家所蔵石工道具
6. まとめ

1. はじめに

県指定史跡甲府城跡（以下、甲府城跡）では、平成22年9月から鉄門復元工事を着工し、復元根拠に基づき在来工法に則った工事を進めている。復元工事に際し、復元根拠の充実を図るために、櫓門や石垣の修理履歴に係わる文献史料や歴史資料の調査を実施した。

調査を進める中で、『石積の秘法とその解説』（以下、『石積の秘法』）という書籍に出会った。これは明治時代から戦前まで、山梨県内を中心に石積¹⁾をはじめ河川工事や中央線敷設工事等に携わった大久保森造氏により記された、数少ない石積の技術書である。

昭和33(1958)年に出版されてから現在に至るまで再版を重ね、出版社に絶版しないと言わしめ、石積の仕事をしている者なら一度は目にしたことがある教科書のような存在と言える。内容は、主に近代の間知積の技術を紹介している。

甲府城跡に関する記述も見られるが、森造氏の先代が甲府城の石垣を修繕したということと、その際に使用した道具の写真のみであった。（図6左下写真）

甲府城跡に関する記述は前記したもののみであったが、森造氏が関連史料を所蔵している可能性があると考え調査を開始した。同時に明治時代から昭和時代にかけての工事記録や石積技法の記述等から、山梨県の土木技術の系譜を辿ることが出来る貴重な文献であると捉え、森造氏を初め大久保氏がどのような流れで技術を習得するに至ったのか追及することとした。

なお、関係者の敬称は省略させていただく。

2. 石積技能者大久保氏

2.1 技能者としての系譜

森造に聞き取り調査を試みるも、昭和46(1971)年に享年85歳で亡くなっていた。しかし森造の息子で共著者の森一と、姉豊子に聞き取りを実施した。

ここで簡単ではあるが、森一、豊子を紹介しておき

たい。森一は昭和7(1932)年に生まれ、昭和31年まで甲府に住んでいた。幼い頃から森造について様々な現場で仕事を見てきたためか、森一自身も技術者としての道を進んでいる。姉の豊子は、幼い頃から見続けてきた父を尊敬しており、森造が残した文書や道具を大事に保存している。

両名によると、大久保家は甲府市宮前の八幡神社正面に土地を持ち、代々石積や河川工事等の仕事を請け負っていた。森造は3人兄弟の次男で、先代である親の姿を見て自身も石積の道に進んだ。長男芳正が家督を継ぎ、三男平治郎も手伝い、兄弟で仕事をすることも珍しくはなかった。森造達は「黒鍬」²⁾と呼ばれ、弟子だけでなく役所の人間にまで、自らの持つ技術を隠さず教えていた。

森造は戦争中、近衛師団に配属され、在郷軍人会の会長や甲府市の市議会議員も務めた。文章を書くことが好きで、石積関係の資料も多く書いていたが、晩年そのほとんどを自ら燃やしてしまった。

ここで、現段階までに判明した大久保家の系図をまとめておきたい。豊子の娘まき子の協力を得て、明治時代から現在までの系図（図1）を作成した。

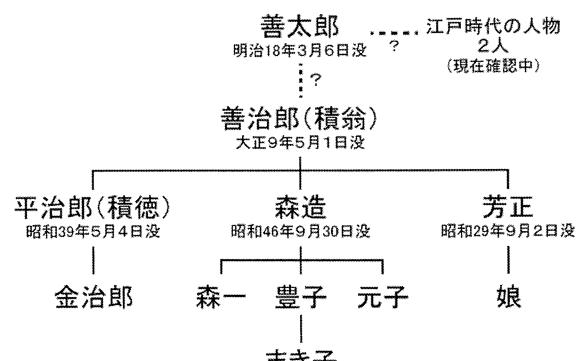


図1 大久保家系図

図1を参照しながら、主要な人物を紹介する。

大久保善太郎

明治18(1885)年没。善治郎との繋がりは不明。

大久保善治郎

森造の父。森造によると、甲府城の石垣修繕に携わった人物。大正9(1920)年、享年77歳で亡くなる。

大久保芳正

森造の兄で、大久保家の家督を継いでいる。明治時代から戦前にかけて大久保家が請け負った工事のほとんどに携わっている。昭和29(1954)年に亡くなる。

大久保平治郎

森造の弟。石積をしていたが、戦後は農業を始めたため石積から退いた。昭和39(1964)年に亡くなる。

図1から、大久保家が代々石積の仕事を続けてきたことがわかる。親から子へ、そして兄弟へ、一族揃って石積に携わってきた由緒ある家系である。

また、関係性が不明であるため推測の域を出ないが、善太郎が善治郎の先代であるならば、善治郎の没年からみて、系譜は江戸時代まで辿ることが可能と考えられる。この点に関しては、引き続き大久保氏らの協力を得て追跡していきたい。³⁾

2.2 大久保家の居住地

森一への聞き取り調査から、大久保家が甲府市宮前町の八幡神社周辺に住んでいたことが判明した。八幡神社正面の本宅に住んでいたのは長男芳正で、森造、平治郎はその周辺に家を構えていた。家の周囲には資材置き場や蔵、道具倉庫等が建ち並び、大久保家が榮えていた様子がうかがえる。居住地周辺は安山岩の露頭が多く、八幡神社裏には現在も露頭が見られる。愛宕山にも隣接し、材料は豊富であったようだ。

図2は、森一が作成した昭和初期の大久保家周辺の地図である。当時の様子がわかる興味深いスケッチだ。なお、大久保家の居住地に関しては詳しく考察する必要があるため、次章で触れることにする。

2.3 明治時代以前の大久保家

ここまで大久保家の系譜が江戸時代まで遡れる可能性を示唆したが、裏づけとなる資料がもう一つある。

図1作成にあたり、甲府市清泉寺にある芳正の墓地と、甲府市大泉寺にある森造と平治郎の墓地の調査を実施した。⁴⁾

芳正の墓地を調査した際、住職に聞き取りを実施した。住職によると、過去帳の芳正の戒名には「巖」という文字が入っているとのことであった。「巖」は岩石を表す漢字であり、家業に因んだ戒名といえる。

平治郎の墓地には、善治郎と平治郎の銘が刻まれていた。銘を確認したところ、善治郎は「積翁」(図4)、平治郎は「積徳」(図4)の文字が戒名に含まれており、生前石積に携わっていたことがうかがえる。大泉寺の住職によると、生前の石積による働きと人柄を評価し、戒名に「積」の字を入れたとのことだ。

また、平治郎の墓地には以下のような銘文が刻まれていた。(図4)

我家ノ祖先国主様ヨリ名守ヲ賜ハリテ組頭ヲ命ゼラレテヨリニ十一代墳墓ハ古府中来福寺ヨリ清泉寺へ清泉寺ヨリ当山ニ移ス 父平治郎ハ農林遞信兩大臣ヨリ感謝状ヲ賜ル山梨県知事ヨリ特別賞優秀賞ヲ甲府市長ヨリ市長賞ヲ授与サル褒賞ヲ受ル事二十有余回ニ及ブ (中略)

昭和三十一年秋彼岸 大久保金治郎

金治郎によると、この銘文は平治郎が生前自身で刻んだものである。平治郎は、石積技能者として、自らの功績を書き留めたかったと思われる。しかし、銘文のもととなる明確な資料は確認できていない。

銘文にある来福寺⁵⁾の所在地は、図3で八幡神社西側に確認できる。図2では、図3で来福寺があった場所が資材置き場となっているため、森造の時代に来福寺はなかったようだ。来福寺が大久保家の菩提寺であるならば、21代前から続いているという表記と併せて、江戸時代には甲府に住んでいたと考えられる。

これらの銘文は裏づけとなる明確な資料が見つかっていないため、口伝と捉えて参考にしたが、今後の調査に有益な資料となると考え、調査課題とする。

3. 大久保家の居住地に関する問題

本章では、2.2で述べたように、大久保家の居住地の問題について考察していく。

大久保家が、江戸時代には石積の仕事をしていたと仮定し、図2を江戸時代(1700年代初め)に描かれた「甲府城下絵図」(図3)と比較検証してみた。

図2と図3を照らし合わせると、図2では芳正宅である場所が、図3では町屋や八幡領になっていることがわかる。また、該当箇所には山方同心や川除同心の屋敷地との表記が見られ、大久保家の土地とほぼ一致している。このことから、大久保家の祖先が、山方同心や川除同心である可能性が浮上してきた。

では山方同心、川除同心とは一体どのような身分であり職務であったのだろうか。山方、川除という名前から、土木河川工事に携わる身分と推測される。また、同心と付くことから士分であると考えられるが、関連史料が極めて少なく未だ不明である。⁶⁾

次に、大久保家がいつからこの土地に居住しているのか。図1から江戸時代まで遡れる可能性がある点、図2と図3の整合性という点から、江戸時代には八幡神社周辺に家を構え石積に携わっていたと考えられる。

ただ、柳沢家家臣として江戸から移転してきたのか、在地で雇われたのか、石積技能者としての大久保家の流れは未だに不明であるため、山方同心、川除同心という身分の確認と併せて今後の調査課題である。

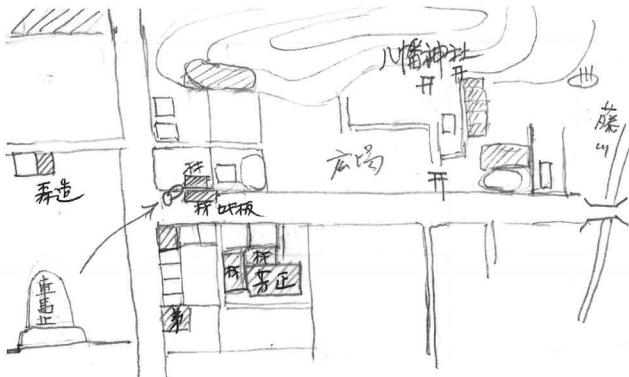


図2 森一作成 大久保家周辺地図
※「材」は資材置き場、または蔵を指す。

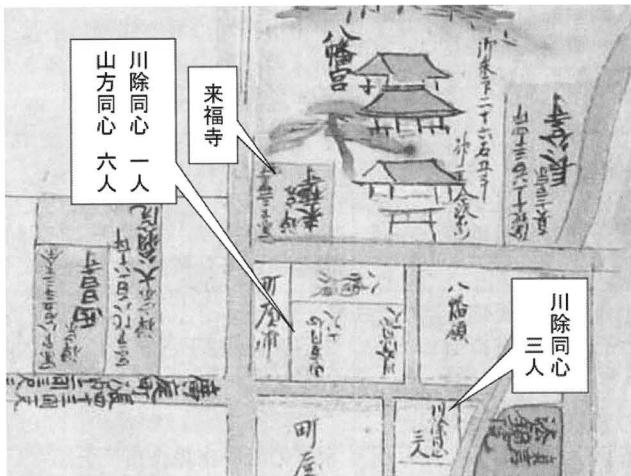


図3 「甲府城下絵図」(一部) 柳沢文庫蔵



図4 平治郎墓地（甲府市大泉寺）

4. 「社会奉仕録」による大久保氏構築石積

4.1 大久保家家宝「社会奉仕録」の発見

森一、豊子らに所蔵資料の提供を依頼したところ、森造が記した「社会奉仕録」(図5)と石工道具(図6図7)を発見したと、まき子から連絡を受けた。

今回発見された「社会奉仕録」は、家宝大久保家永久保存と銘打っており、約A4版で、表紙含め32ページに亘り全編森造の直筆となっている。

内容は、大久保家祖先の由緒から始まり、森造の経歴、大久保家で築いた石積等が事細かに記載されている。これらを書き残すことで、後世の土木技術の向上に繋げることを目的として作成された。

現段階までの調査で、大久保家から発見された文書はこれのみである。直筆の貴重な文書であり、過大表現のない文章から、真実性が高いと感じられる。県内土木技術の変遷を辿る貴重な手がかりになると考える。

4.2 「社会奉仕録」にある石積の記録

注目すべきは巻末の参考部分に記された施工記録である。明治維新以前の祖先の仕事から始まり、戦後に森造が携わった石積までが一覧で記されている。

この一覧を検証することで、明治時代から昭和時代

にかけての土木技術の変遷を知る手がかりを得ることができると考えた。

そこで、本項では「社会奉仕録」に記された構築物を検証し、現存するものを時代別にまとめることとする。「時代」「施工に携わった人物」「原文」のほかに、原文から場所を推定した「解釈」を表1にした。

表1は、「社会奉仕録」に記載された構築物の中でも、江戸時代の業績で別途検証が必要なものは除いている。

なお、森造と仕事をしたことがある技術者への聞き取り調査から、「社会奉仕録」に記載されている以外にも、森造らが手がけた構築物がいくつか判明しているが、これについては別の機会にまとめたい。

「社会奉仕録」に記載されているものは、大久保家の数ある構築物の一部にすぎないということを、聞き取り調査の点から明記しておく。

表1からは、大久保家が公共事業だけでなく個人依頼の工事も請け負っており、県内外問わず仕事へ出でているという点。河川工事道路工事等様々な工事に携わっている点が読み取れる。市街地開発やインフラ整備が盛んであった時代に、甲府を中心に各地で活躍していた一派であったようだ。

表1 「社会奉仕録」参照部分一覧

	時代	携わった人物	原文	解釈（想定地）
3	明治5年頃	善次郎	明治初年甲府城の西南部恩賜林館裏手よりその以北にかけて修繕して仕上げた。	恩賜林記念館の裏手から北
4	明治10年頃	善次郎	甲府市錦町旧県庁敷地周囲の石垣を積んで据えた。	甲府市丸の内1-18周辺
5	明治時代	善次郎とその子弟	甲府市水道、山宮片山の西荒川の取入口より始まり市内主なる路下を掘り下げ割石を山崎より運び両側に並べ水道を開け是に石の甲蓋を架け渡し通水の施設をした。	甲府市宝1丁目周辺と想定
6	明治25年以降	善次郎・芳正と部下	甲州信玄堤の修築石積（内務省直カツ）（ネンド節時代）	釜無川流域と想定
7	明治時代	芳正とその子弟	東山梨鶴瀬の橋台高五間の高台を積み上げ二回崩壊した三度積み直して当局に渡した。之を仕上る為に大久保家は田五十俵他を手放した。	甲州市鶴瀬にある鶴瀬橋か。原文の「高台五間」から高さ10m弱の橋台と想定
8	明治25年以降	善次郎	国鉄中央線路側土止石積み及ビヤなど石積に関係あるもの一切積んだ。	範囲が広く特定が困難
9	明治33年以前	芳正とその子弟	西八代郡芦川村地区水力発電新敷地第一～第三まで敷地石積完成。	現在の芦川第一発電所、芦川第二発電所、芦川第三発電所
10	明治時代	善次郎・芳正	甲府市山田町若尾逸平氏後民造氏地新部に出入り田、畠耕地整理と石垣全部を担当した。その数多くして数えられない程である。	甲府市中央2丁目周辺
11	明治33年	善次郎とその子弟	甲府市商業学校敷地の周囲石積を完成した。請負人立川氏当時の市会議員秋山與吉氏と玉越米次郎氏委員。	現在の甲府市総合市民会館
12	明治34年	善次郎とその子弟	東山梨郡一町田中 中学校敷地周囲の石積を完成した。	現在の日川高校
13	明治時代	芳正とその子弟	甲府市三水門荒川左岸堤防石積。	甲府市相生1丁目荒川沿い
14	明治時代	芳正とその同志	静岡県下乙女峠軍道新設の為甲府市の石積師連れ出張三里に亘る道路の側構を積み納免たり陸軍賞の指導厳なりき。	静岡県御殿場市乙女峠
15	大正3年	芳正親方として積ませたりした	甲府市相川地内躑躅ヶ嶺眼下古府中大貯水池周囲堤防石積全部。	武田神社近くの竜華池
16	大正時代	石積は芳正稿は森造	甲府市百石町新道稿々台石積と鉄筋コンクリート稿築工「当時甲府市役所では始めてのコンクリート稿である。」	甲府市丸の内2丁目周辺と想定
17	大正2年	芳正・平次郎とその子弟	甲府市愛宕山裾甲府市水道貯水池の南側高台石垣間知石三〇を使い積む。	甲府市愛宕町372と想定
18	大正時代	芳正・平次郎	甲府市武田神社正面石段の両側土止石垣を積む。	武田神社（現在は改修されている）
19	昭和2年完成	芳正名義 森造指導	甲府市飯田町甲府市水泳場新設完成した当時は東洋一と称した。時の市会議員中込六之助、萩原新一郎両氏。	甲府市飯田5丁目周辺。飯田プールと呼ばれた水泳場
20	昭和時代	稿台は芳正稿は森造	甲府市深町地内省路稿稿台を積み是に鉄筋コンクリート稿を架けた。	甲府市城東2丁目（省路橋）
21	昭和時代	芳正名義 森造指導	甲府市新紺屋小学校校庭拡張の為同校庭の西南角にある正念寺を愛宕山華光院南に移轉した。	華光院（甲府市元紺屋町33、現在は良林寺）

22	昭和時代	芳正・森造 合作指導	甲府市日影西地区古城西北一丁道路西側の小貯水池新設(10年)	古府中町1号公園隣の西耕地溜池と想定
23	昭和時代	芳正	甲府市和田町地区和田槁上流一〇〇米上河川堰堤築工完。	和田町の西沢川にある西久保堰堤と想定
24	昭和時代	芳正・森造	甲府市積翠寺町五新地内積翠寺槁槁台石積及槁果架渡し。	甲府市下積翠寺の相川に架かる橋と想定
25	昭和時代	森造指導	帝室林野局に出入し甲府市積翠寺山砂防工事を十一年連続従事し県下模範施設として認められ山梨県庁より技術者を見学派遣された。	上積翠寺にある矢崎堰堤と想定
26	昭和時代	上野雄一監督 森造指導	甲府市御崎町甲府一校正門前より袋町に通ずる新道を建設路側をコンクリートを以て固め開通式までやった。	甲府市美咲2丁目周辺。県立甲府第一高等学校前の通りと想定
27	昭和時代	芳正名義 森造指導	甲府市増山町より元の司令部前通りまで道路の拡張完成。	国立甲府病院東の道路と想定
28	昭和時代	森造	甲府飛行場建設途上昭和八年九年満州ソ連国境に出動し築城に参加し九年未凱旋した。	甲府飛行場は甲府市大和町北中に存在した
29 (1)	昭和時代 (戦後)	森造	北巨摩郡長野県境ふたつなぎ各砂防工事堰堤築工五年。甲府市伊勢町中澤建設の請負のもの。	資料不明
29 (2)	昭和時代 (戦後)	森造	東八代郡金生村地内砂防工事堰堤築工その他の石仕事三年。金生村尾山加藤重成氏請負のもの。	笛吹市御坂町尾上周辺と想定
29 (3)	昭和時代 (戦後)	森造	甲府市貢川堤防石積毎年参加した。	資料不明
29 (4)	昭和時代 (戦後)	森造	静岡県熱海道路工事側構石積仕事に参加三年。甲府市伊勢町中澤長吉請負にかかわるもの。	資料不明

※表内の付帯番号は「社会奉仕録」によるところとする。

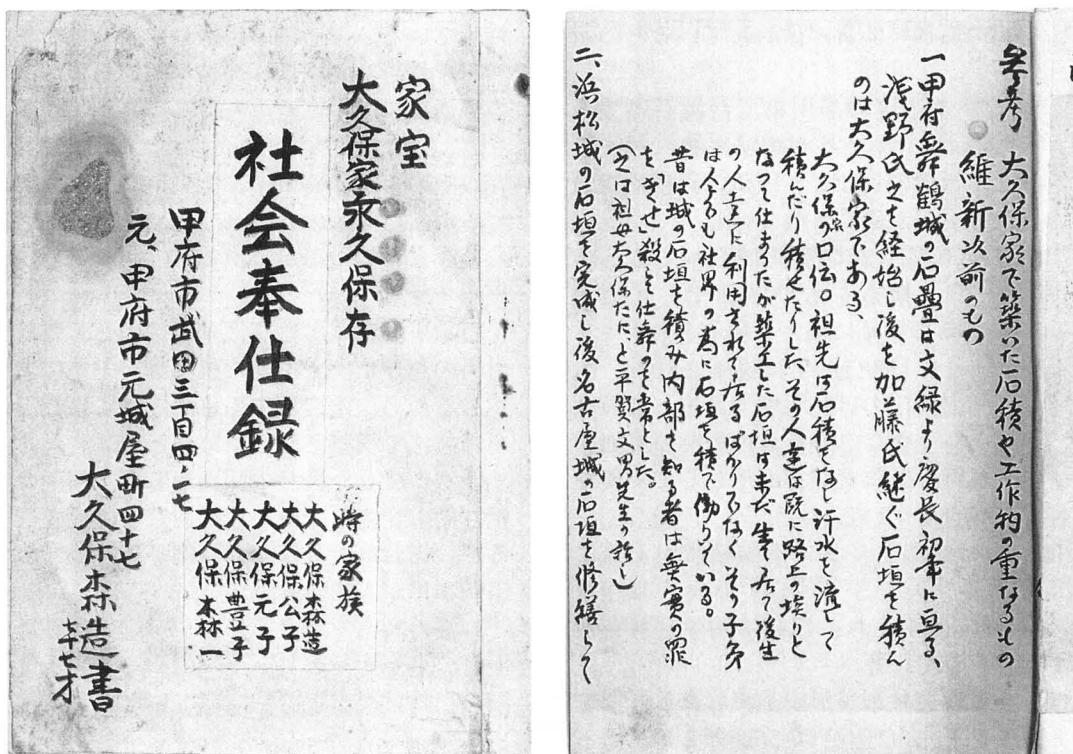


図5 「社会奉仕録」(左) 表紙 (右) 本文

4.3 近代以降の石積技術と変遷

表1をもとに現地調査や資料調査を行い、現存する石積を確認し、表2に時系列でまとめた。既に消失しているものや、改修されているものもあり、表1を全て把握するのは困難である。表2の中には、現存していないが、当時の石積が古写真に写っているものがあったため、時代性からみて大久保家が係わっていると判断し、参考にしたものも含まれている。

併せて、大久保氏と直接的な係わりは窺えないが、山梨県および周辺地域で残存し、構築年代がおおよそ明確である石垣を比較事例として掲載する。大久保氏とそれ以外の事例を並べることで、石積技術の変遷の理解に繋げたい。

表2に掲載した各事例の概要は次のとおりである。

なお、表2-①から④は、大久保氏とは直接関係はないと思われるが、甲府城築城期からの石垣の変遷を、周辺地域のものも含めて掲載した比較事例である。

表2-⑤から⑦は、大久保氏が関わったという確証はないものの、大久保氏が活躍していた同時代に構築された石積であるため、大久保氏が関わっていた可能性も含めて掲載した比較事例である。

表2-①は、甲府城跡天守台石垣である。自然石または粗割（二分割程度）の石材を用いた野面積み石垣で、文禄から慶長年間の織豊城郭に見られる特徴を持つ。県内では、都留市勝山城、周辺地域では小諸城や松本城の石垣が同時期である。

表2-②は、静岡県清水市の小島陣屋跡石垣である。陣屋の建設年代（小島藩の立藩）から宝永元（1704）年に構築された。一次史料の実見には至っていないが、甲州の石積技能者が係わっているとの伝承がある。

表2-③は、東京都港区の品川第三台場石垣である。嘉永6（1853）年、アメリカ艦隊来航に対する防衛として構築した台場の一つで、甲州の石積技能者が係わっていたとの史料が確認されている。

表2-④は、長野県佐久市の龍岡城石垣である。龍岡城は五稜郭と同じ構造をもつ城郭で、元治元（1864）年、明治維新の争乱に備えて構築された。

表2-⑤は、明治14（1881）年に構築された、山梨県南アルプス市市之瀬川の砂防堰堤である。ほぼ直線の勾配で、自然石を主体に3から5段程度の野面積みが確認できる。県営砂防事業発祥の地として、現在も河川に並行して残存している。

表2-⑥は、山梨県南アルプス市御勅使川上流にある芦安堰堤である。大正5（1916）年から昭和3（1928）年にかけて施工され、現在は国の登録有形文化財として保存されている。

表2-⑦は、山梨県北杜市釜無川上流にある変電施設の石積である。大正15（1940）年完成のものであるが、昔の石積が良く残っており、現在も稼働している。

表2-⑧は、表1-3に該当する甲府城跡恩賜林記念館裏の石積である。森造の記録によると、明治5（1872）年頃、この周囲の石積を修繕したとある。実見すると、入角部の一部が新しく積まれているのがわかる。

表2-⑨は、表1-8に該当する、明治36（1903）年に甲府まで開通した中央本線鉄橋に付属する石積⁷⁾である。構築年代は、八王子—甲府間の工事が着工した明治29（1896）年から開通時期に限定されるが、表1-8の記述から、施工時期が一致するため、大久保家との係わりが指摘できる。『石積の秘法』によると谷積に分類される。森造は当時谷落し積と称し、各地鉄道の橋梁翼壁工事の土留として盛んに積んだと記録している。

表2-⑩は、表1-12に該当する、山梨県山梨市にある県立日川高校の敷地内石積である。表1から、日川高校（当時の日川第二中学校）が開校した明治34（1901）年に構築されたと考えられる。日川高校の敷地周囲を囲っているが、大久保氏が積んだと思われる石垣は南側の一部しか残っていない。『石積の秘法』によると布積に分類され、屋敷の周囲に適した上品な積み方と記録している。

表2-⑪は、表1-18に該当する甲府市武田神社正面の石積⁸⁾である。現在は改修され、当時の石積を見ることはできない。『石積の秘法』によると、武田神社の石積は鬼積と分類される。堅固に積まれているが、見面が悪いので鬼積と呼んでいた。

表2-⑫は、森造と仕事をしたことがある土木技術者に聞き取り調査をした際に発覚した、森造の石積である。表1に記載はないが、相川沿いに現在も一部が残っている。『石積の秘法』による笠置積である。自然石を利用して積み、天端を間知石で仕上げる、道路の側溝等に適した積み方であるとしている。

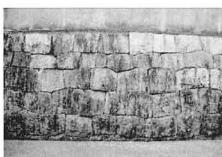
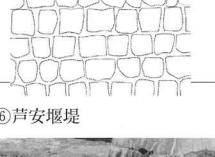
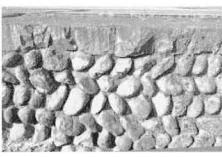
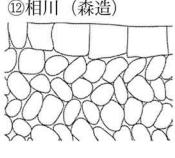
以上のような石積が、山梨県および周辺地域に残存するが、自然石の石積と、精加工された石積が同時期に共存または反復して出現していることが、表2から理解できる。

石積が共存または反復する理由としては、工事費や材料の調達状況、現地の風土等、工事によって差異が生じるため、その場や工事の仕様により、最も適した石積技法で構築されるためだと考えられる。

今回作成した表2の配列からは、明確な時代観や石積技術の変遷を一概に述べることはできないと思われるが、これは大久保家の事例を集めたのみであるため事例不足が否めない。

今後の調査で、大久保家の事例をはじめ、ほかの技能者の事例も検証し、事例の充実を図ることで、山梨県の土木技術の変遷を辿っていきたい。

表2 大久保氏関連事例と山梨県内外周辺事例

	大久保氏関連事例	山梨県内外周辺事例
1600		 ①甲府城跡
1700		 ②小島陣屋跡 (清水市)
1800		 ③品川第三台場 (港区)
1850		 ④龍岡城 (佐久市)
明治元		
1875	芳正 森造 平治郎	 ⑧甲府城跡 (善治郎)   ⑨中央線沿線 (善治郎) 
1900		 ⑩日川高校周辺 (善治郎とその子弟)   ⑪武田神社 (芳正・平治郎) 
1925		 ⑥芦安堰堤 
1950		 ⑫相川 (森造) 
		 ⑦釜無川変電施設 

5. 大久保家所蔵石工道具

「社会奉仕録」の発見と同時に、まき子宅から森造の石工道具（図6図7）が発見された。

発見された道具の一部は、善治郎が甲府城跡石垣を修繕した際に使用した道具として、『石積の秘法』内に写真が掲載されている。（図6左下）

写真に写っている大金テコは発見されなかつたが、森造によると、写真内の大金テコ2本と3貫目の玄翁（図6-1と想定）が善治郎の道具だったので、善治郎の道具も含め、全て森造が長年愛用した道具だ。

今回発見された道具は次のとおりである。

図6-1は矢ジメである。横28cm、柄を含めた長さは90cmもあり、今回発見された中でも一番大きい道具である。石を割る際、挿した矢を打ち込むのに使用する。

図6-2は玄翁である。柄はなく、横22cmの金物部分が残るのみである。「一山」と銘が彫ってあるが、これは道具のメーカーの名前である。

図6-3、4、5はノミである。3は先が平たく、長さは24.5cmである。4は19cm、5は17.5cmほどで、先が四角錐になっている。いずれも石の加工等に使われるものである。

図6-6はクサビである。8cmほどの小さいものだが、隙間に埋め込み石を割るために用いられる。

図7-1、2はコヤスケである。平たい方を石にあて、もう一方を別の石頭という金槌で叩いて石を加工する。1は横13.3cm×長さ32cm、2は横8.5cm×長さ24.7cm。1には、図6-2同様「一山」の銘が彫っている。

図7-3から6は、石積に直接関係がない道具と思われる。4は鉄道の線路の釘。3は釘を打ち込むために支える道具だと思われるが、用途が明確でないため現在確認中である。5と6は斧で、木を伐採したり、柄の材料となる枝を採る際に使用したと思われる。

森造と関わりがある石工達に聞き取り調査をした中で、森造は積み石工だという証言を耳にした。詳しく聞くと、山梨県内の石工には石積専門の「積み石工」、山から石を切り出す「割り石工」、石を墓石等に加工して販売する「加工石工」といった専門属性があることが判明した。

作業が異なれば各属性によって使用する道具にも差異が出てくるはずである。戦中戦後、石積に従事していた年配の積み石工によると、積み石工と割り石工は連携することが多かったので、道具に違いはあるものの重複している部分もある。しかし、加工石工は店を構えて販売をしているためあまり関わりがなかったとのことである。

今回発見された森造の道具以外にも、ほかの石工の道具もいくつか調査をしてきた。所有する道具の種類を検証することで、その石工がどの属性なのか、また属性の中でどのような作業を担当していたのかが判明

してくると考える。現在も、いくつかの石工の道具を調査中であるため、今後まとめていきたい。

6. まとめ

これまで過去20年に及ぶ甲府城跡の史跡整備の中で、城内石垣の検証や文献史料の調査を継続して進めてきた。しかし、城内の石垣は、築城期からのものもあれば明治時代以降に積み直されたとされる石垣も存在しており、未だ城内全石垣の時代観は把握しきれてはいない。文献史料の面からも、山梨県における江戸時代の石垣構築の史料はほとんど確認されておらず、江戸時代に存在した石積技術集団の一部が判明しているのみである。古来より、周囲を山に囲まれ盆地に川が集中している山梨県には、水害と戦ってきた歴史がある。城をはじめ、堤防や砂防堰堤等、水害対策に知恵を注いできた。その知恵と技術力の結晶として、石積技術が発展してきた。

本稿で大久保氏を取り上げたのは、はじめに述べたように、山梨県の土木技術の系譜を辿るためである。山梨県の風土に合った構築物は多く残っているものの、その技術を伝える史料はあまり見られず、数多い石積技能者の中でも『石積の秘法とその解説』のような技術書を残し、現在まで読まれ続けている技能者は森造のほかに類を見ない。大久保氏の石積技術を一例と捉え、史跡堤防や登録文化財堰堤等、山梨県の土木技術史にとって有益な情報が得られると考える。

また、大久保氏の残してきた石積技術を検証することにより、石垣の時代観や技術を体系化し、甲府城跡の石垣を文化財としての観点から捉えるため、石垣の評価基準作成に繋げていきたい。ひいては技術者と技能者の評価にも繋げていければと考える。

本稿全体を通して述べてきたことは、まだ検証の余地が多く推測の域を出ない。大久保氏の技術伝承の系譜、山方同心と川除同心の身分、在地の一族であるか等、調査課題は多く残っている。同時に、大久保氏以外の石積技能者へも聞き取り調査を実施することができたので、別の角度からも石積の系譜を追っていく。

大久保氏の調査は、一技術者の系譜から山梨県の土木技術の系譜を辿る足がかりとなり得る大変興味深い事例である。引き続き調査継続し、土木技術史の充実を図っていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、大久保森一氏、大久保豊子氏、大久保まき子氏、大久保金治郎氏をはじめの方々にご協力いただきました。末筆ではありますが、感謝の意を表したいと思います。

北垣聰一郎氏、宮里学氏、西海真紀氏、垣内律子氏、佐藤祐義氏、望月秀和氏、池谷愛三氏（順不同）

図6 大久保家所蔵石工道具

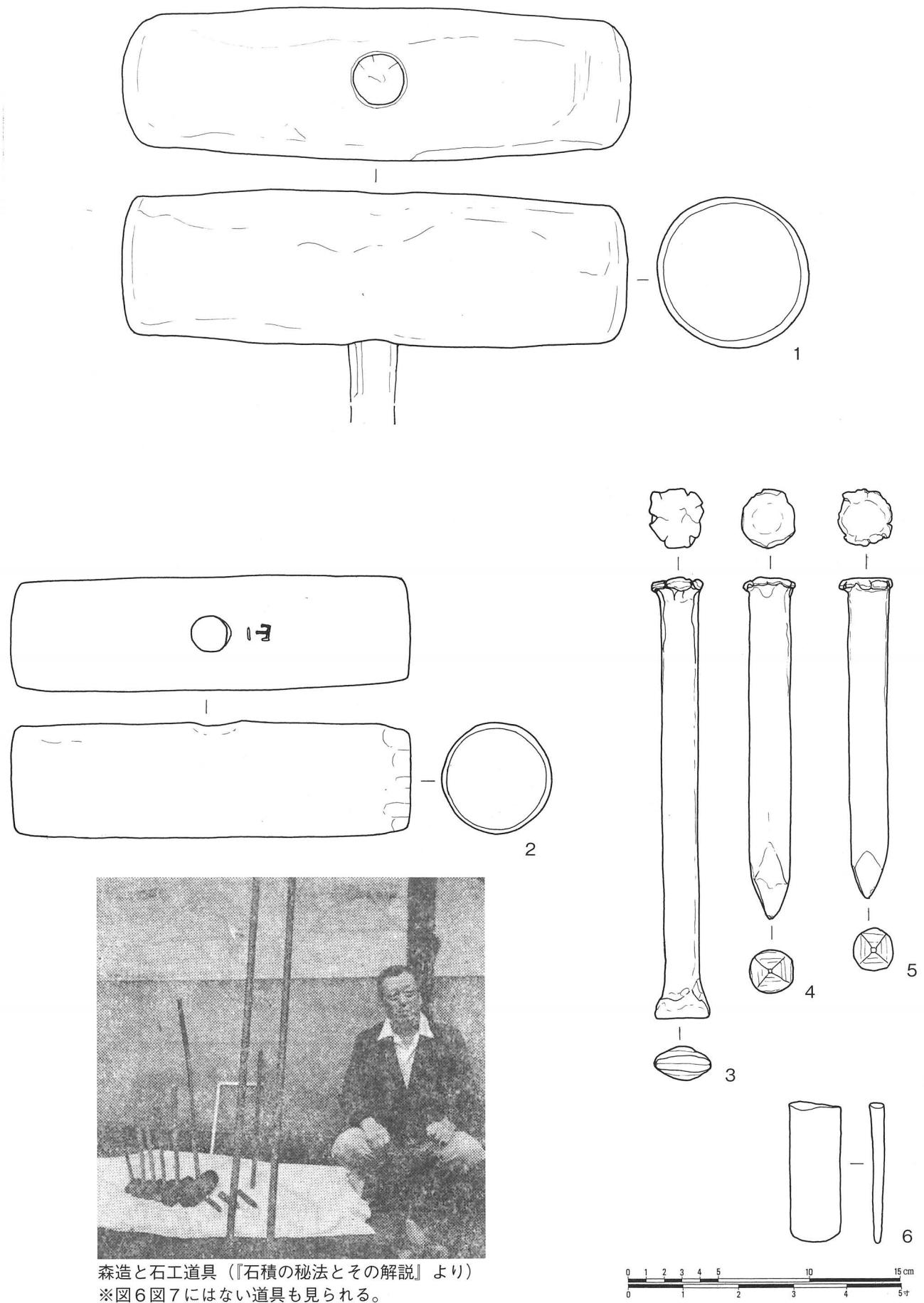
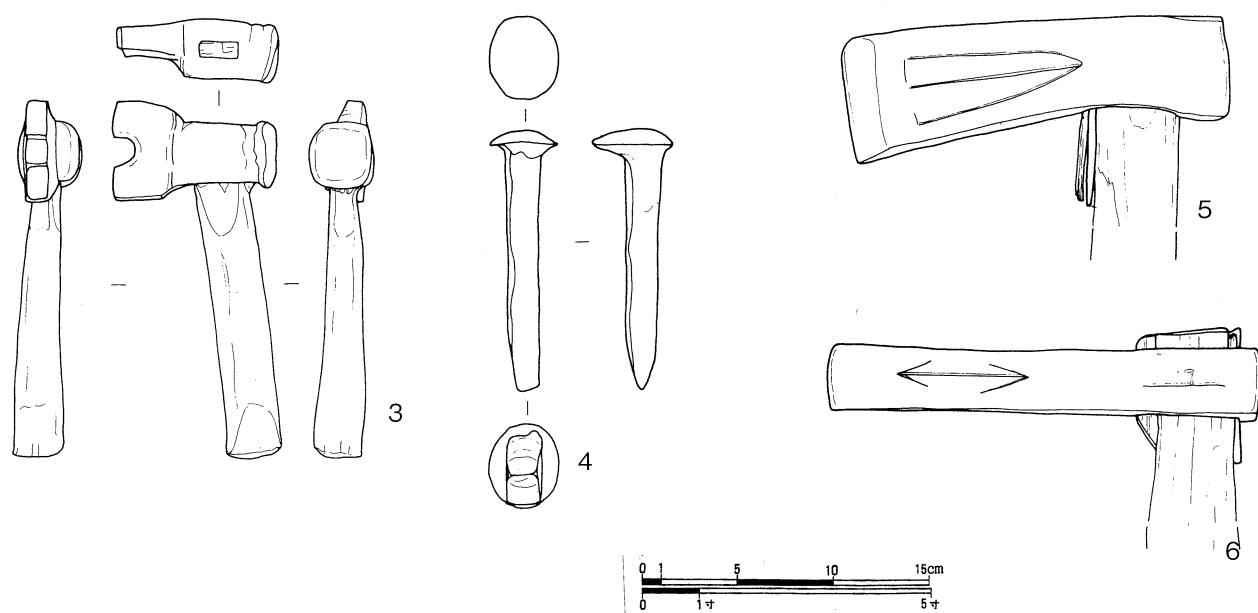
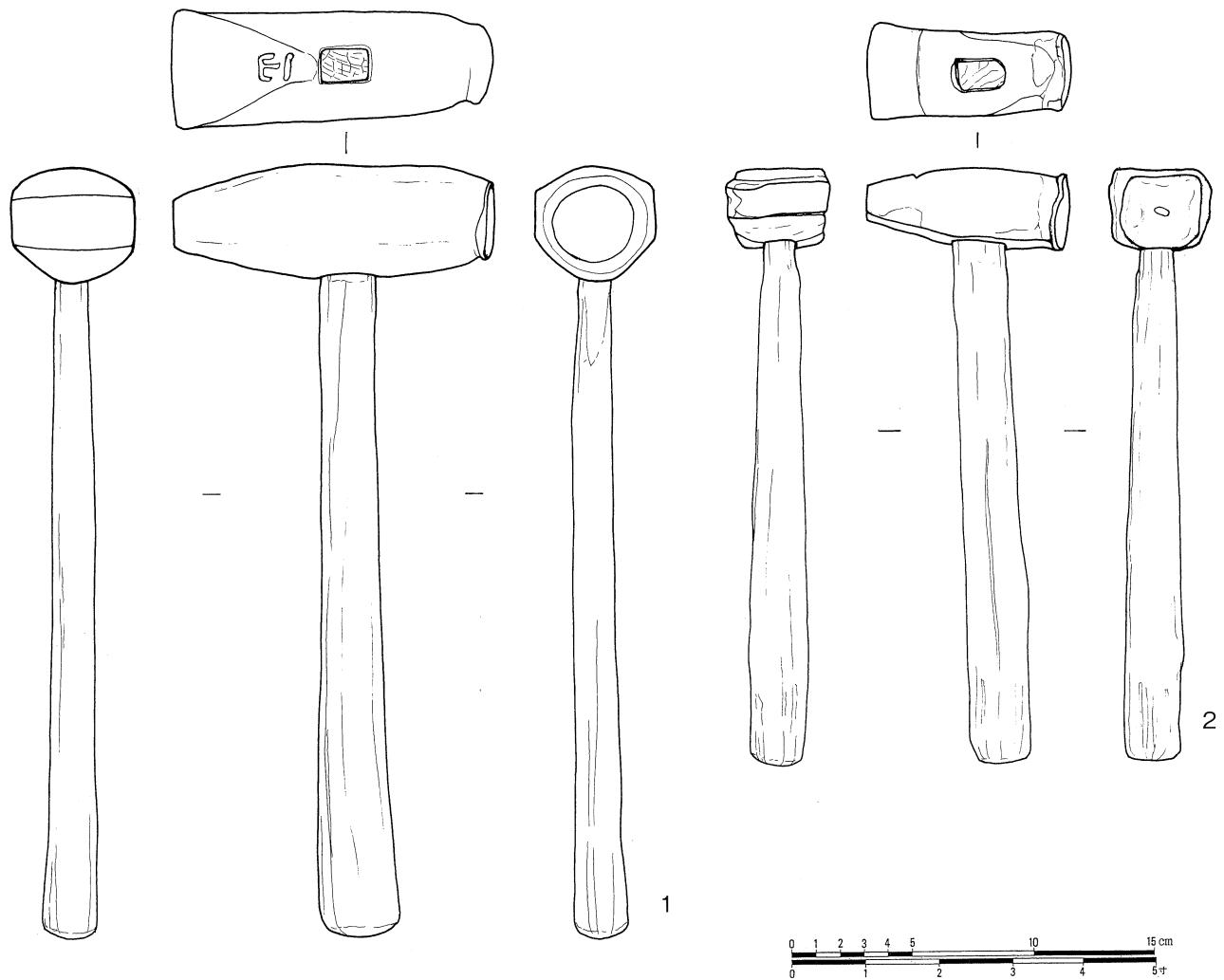


図7 大久保家所蔵石工道具



註

- 1) 本稿において、大久保氏関連の構築物および明治時代以降の構築物を「石積」、それ以前の構築物を「石垣」と呼称することとする。
- 2) 甲府周辺の石工の中で、石工を本職としている親方のような存在を、敬意を込めて黒鍬と呼んでいた。石積の角を積めるほどの技能者で、最低でも10年間の経験を積まなければなれなかった。山梨県における黒鍬という呼称について、情報も集まっている。
- 3) まき子の調査によると、戸籍謄本から、善治郎の2代前までの存在が確認できていること。
- 4) 墓地の調査は森一、金治郎に許可を得ておこなった。
- 5) 『甲斐国 社記・寺記』によると、銘文に記されている来福寺は、慶応2(1866)年に台風で倒壊したため再建中であると記されている。しかし、それ以降の記録はなく、存在は不明である。
- 6) 笹間良彦『江戸幕府役職集成(増補版)』によると、山方とは藩有林の監査役。同心とは、与力の下に配属され、武士の中でも一番低い身分であった。川除についての記載はなく、これらはあくまでも江戸における役割であるため、甲斐国における役割は不明である。
- 7) 『市制100周年記念写真集甲府物語』p43より。石和町平等川鉄橋の石積。
- 8) 三沢一也氏所蔵絵葉書コレクションより、大正時代末期から昭和時代初期にかけての武田神社。

参考引用文献

- 大久保森造・大久保森一『石積の秘法とその解説—改訂増補版—』(理工図書、1994)
- 笹間良彦『江戸幕府役職集成(増補版)』(雄山閣出版、1994)
- 『甲斐国社記・寺記 第三巻』(山梨県立図書館、1966)
- 『県指定史跡甲府城跡—下巻—』(山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第222集、2005)
- 「写真集甲府物語」編集委員会『市制100周年記念写真集甲府物語』(甲府市、1990)
- 『砂防法制定100年記念 山梨県砂防誌』(「山梨県砂防誌」編集委員会、1997)
- 『台場—内海御台場の構造と築造—』(東京都港区教育委員会、2000)